

スキナー以後の行動分析学(16) 長期的な視点で行動を捉える

長谷川 芳 典

スキナー以後の行動分析学(16)長期的な視点で行動を捉える

長 谷 川 芳 典

1. はじめに

行動分析学が対象とする「行動」は、「いま」に注目した行動である。これまでの行動分析学の関心事はもっぱら

- ・いま、その行動が頻繁に起こっているのはなぜか？
- ・いま、その行動が起こりにくい（もしくは長続きしない）のはなぜか？
- ・これから先、望ましい形に行動を変えていくためには何をどうすればよいか？

といった点にあった。行動随伴性の原理に基づいてそれらを分析し、必要に応じて適切な改善策を立案し実践していくことが中心的な課題となっていた。

行動分析学は比較的短期間における行動改善に大きく貢献してきたが、その一方、人生全体の評価、あるいは、ライフヒストリーに関わる諸問題といったように、何十年にもわたる過去を「意味づける」ことにはあまり目を向けてこなかったように思われる。

しかし、近年、行動分析学においても、後述するように、長期に及ぶ安定的な行動傾向 (trait) に注目し性格心理学との接点をさぐる動きも見られるようになってきた。

その一方、他領域においては、パーソナリティやアイデンティティについての伝統的枠組みを重視した研究が進む一方で、安定的かつ一貫した行動傾向が過大視されることへの批判もあがってくるようになった。パーソナリティについては、ミシエルの批判 (Mischel, 1968) があり、さらに近年、唯一無二で一貫した「自己」という前提に対して疑義を唱える一般書が、精神医学、解剖学、心理学、社会学、哲学など、異なる領域のさまざまな専門家から刊行されるようになってきた。(例えば、和田, 1994; 養老, 2004; サトウタツヤ・渡邊, 2005; 上野, 2005; 河野, 2006)。

行動分析学が長期的視点から行動の安定性や一貫性に注目するようになった一方で、他領域においては逆にそれらを見直す論調が展開されるようになってきたことによって、結果的に両者の接点生まれ、かつ、行動分析学が得意とする分析ツールを新たに適用する可能性が広まってきた。

以上をふまえ、本稿では

- (1)まず、行動分析学は過去をどう扱うか、について概念的枠組みの基本を整理し、
ついで
- (2)Vyse (2004) の論考を中心に、行動分析学が行動をより長期的な視点から捉えるようになった経緯について考察し、

さらに

(3)一貫した「自己」という素朴な前提に対して疑義を唱える一般書の論調に対して、行動分析の基本概念である強化、行動随伴性、確立操作などがどう関わるのかについて論じていくことにしたい。なお、紙数の都合上、上記(3)については本稿では今後の検討の指針を示すにとどめ、各領域別の理論に対する行動分析学的対応の詳細については本稿の続編にて順次取り上げていくことにしたい。

2. 行動分析学は過去をどう扱ってきたか

まず、行動分析学が、「過去」をどのように考慮してきたのかについて整理し、長期的な視点から過去～現在～将来を見据える方略について考えてみることにしたい。なお、臨床・応用場面においては、認知行動療法の一環として過去の出来事への対処方法が幅広く開発されているが、紙数の都合上、ここでは基本的な概念的枠組みに言及するにとどめる。

(1)過去の影響

a. レスポンデント条件づけにおける条件刺激、条件反応

梅干しを食べたことのある人は梅干しを見ただけで唾液を出す、一度も食べたことの無い西洋人が唾液を出すことはない。これらは梅干しという視覚刺激が条件刺激となり、唾液分泌という条件反応を誘発するために起こる現象である。

このように、過去のレスポンデント条件づけ体験は、多かれ少なかれ現在の我々を支配している。特に影響が大きいのは、恐怖体験、不快体験として条件づけられた刺激である。もちろん、「懐かしい景色」、「子どもの時の家族の写真」というように、ポジティブな情動反応を誘発する条件刺激もありうる。

b. オペラント条件づけにおける強化、弱化、消去

過去にオペラント条件づけにより強化された行動は生起頻度が高まり、弱化もしくは消去された行動は減多に起こらない。そういう意味では、我々が現在自発しているオペラントはすべて過去の強化・弱化・消去のヒストリーに依存している。

オペラント強化や弱化は単に行動の増減をもたらすばかりではない。シェイピング、分化強化、分化弱化、行動連鎖形成などのヒストリーを経て、より複雑で精緻化された行動が出現するようになる。車の運転、楽器演奏、スポーツ競技などを見れば分かるように、訓練の積み重ねによって形成された行動は、新たな強化機会を増やす。つまり強化・弱化・消去のヒストリーは、いま現在、どういう行動が強化されるのかを決定づけている。

c. オペラント条件づけにおける習得性好子、習得性嫌子

オペラント行動は、行動の直後に好子や嫌子が出現するか、もしくは消失することに依存して強化もしくは弱化される。好子（嫌子）には生得的好子（嫌子）と習得性好子（嫌子）があり、後者はすべて、経験によって形成されたものである。

一般に言われる「価値の違い」あるいは「価値観の違い」は「習得性好子（嫌子）の違いであ

ると言っても過言ではない。

d. オペラント条件づけにおける弁別刺激（刺激性制御）

それぞれの人にとって何が弁別刺激になっているかということも、行動傾向に多様な差違をもたらす。例えば同じ交差点を右折する場合、初心者と熟練者では、安全運転のために手がかりとして利用する弁別刺激が異なる。

物理的に同一の環境のもとにおける行動傾向の差違は、日常生活ではしばしば「性格の違い」に帰属されてしまうが、実際は、環境刺激のどの部分が弁別刺激となっているかという差違、あるいは上記c. に述べたように、何が習得性好子や習得性嫌子になっているかという差違だけで、同一環境のもとでの行動傾向の差違のかなりの部分を説明することができる。

(2)過去の出来事への能動的統制

過去の出来事は現在の行動に機械的な影響を及ぼすばかりではない。オペラント行動の一環として、人々は、「思い出」に耽ったり、過去の嫌な出来事の影響を回避するために能動的に対処することができる。

a. 「思い出に耽る」行動

過去の出来事の思い出に耽るとは、その出来事に関連した条件刺激や弁別刺激を自分自身に再呈示し、情動的な条件反応を誘発したり、その弁別刺激によって特定のオペラントを起しやすくなったりすることである。

ある時代に流行した音楽を聴けば、かつてその音楽が流れていた時に誘発されていた諸々の情動的反応が再び引き起こされる。アルバムの写真やビデオを見ることにも同様の効果がある。

かつて生活した場所を訪れば、それを手がかりとした特定のオペラント行動が起しやすくなる。また多くのオペラントはオペランダム^(*)無しには生起し得ない。かつて愛用していた楽器を10年ぶりに手に取れば、それをオペランダムとする行動（＝演奏）が自発されるであろう。演奏の結果として生じるメロディはさらに別の情動反応を誘発する。

b. 嫌な思い出を回避

上記a. と反対のオペラント行動をとることは嫌な思い出の回避に繋がる。要するに、嫌な出来事に関連した条件刺激や弁別刺激が呈示されにくい状況を作ればよいのである。例えば、嫌な条件反応を誘発する写真や手紙を焼き捨てる、関連する音楽を聴かない、その場所を訪れないなど。

嫌な出来事に関連した条件刺激と同一または類似した刺激を、弱い状態から次第に原刺激の強さに引き上げる形で継続的に呈示し、条件反応を消去するという方法がある。また、クライアントに嫌な出来事について少しずつ語らせ、カウンセラーが黙って聞くということも消去に繋がる。これらはいずれも臨床現場で幅広く実施されている。

このほか、嫌な出来事に関連した条件刺激や弁別刺激と競合するような刺激、つまり同時に呈

*1 オペランダム：人間や動物が操作する環境の一部。ラジオ体操のような自分の体を動かすだけのオペラント行動であれば、特定のオペランダムは必要としない。いっぽう、「鉄棒で遊ぶ」、「自転車に乗る」、「ピアノを弾く」といった行動は、オペランダム無しには生起し得ない。それらの行動を自発させるためにはまず、オペランダムの存在する場所に移動するための行動機会獲得のためのオペラント行動が必要である。

示ることが物理的に不可能であるような刺激を呈示することで、結果的に条件反応やオペラント行動を生じにくくする方法もある。例えば愛犬を亡くして悲しんでいる人に新たに別のペットの飼育を勧めるなど。

c. 累積的な結果を確認することによる確立操作と付加的強化

個々の行動がもたらす結果は微々たるものであっても、蓄積された結果として大きな効果をもたらすことがある。しかし、「ちりも積もれば山となる効果」として知られているように（脚注）、1回の結果の強化力が小さすぎるような随伴性は行動を強化しない。しかし、その累積を目に見えるよう形で表し、達成の節目ごとに社会的な好子を付加すれば、行動は確実に遂行されるようになる。このように、過去の累積的な結果が全体として、現在の行動を強化する場合がある。

具体的には、日々の散歩の連続記録を100回に伸ばす、近くの山に100回登るといような記録更新／達成をめざす行動がこれにあたる。なお、「あと2回続ければ100回連続になる」というような状況を自分自身に明示することは、単なる好子出現による強化に加えて、「ここで休んでしまえば100回連続という栄誉（＝好子）が失われる」という、好子消失阻止の随伴性が働いている可能性がある。

3. 巨視的視点の重要性

上記2. で概観したように、行動分析学は、「過去」が「いま」のオペラント行動に影響を及ぼすことを考慮に入れている。しかし、ここまでの内容は、過去の出来事の「断片」が、「いま」の行動の「断片」の生起頻度に影響を与えると述べているにすぎない。実際には行動はもう少し大きなまとまりをもっており、複雑な関係を構成している。

(1)行動の時間的まとまり

「強化」、「弱化」はもともと、行動を量的に測定ができなければ定義することができない概念である。行動が増えるとか減るといのは、一定の時間内における生起頻度の変化によって測定される。この場合、1種類の行動に限って増減を測ることは造作なくできるが、複数種類の行動の場合の相対比較はきわめて難しい。

例えば、「強化の相対性」に関して有名なプリマックの原理というのがある（Premack, 1962, 1965）。杉山ほか（1998）によれば、この原理は

行動の自発頻度に差がある時、自発頻度の高い行動に従事する機会は、自発頻度の低い行動を強化する好子として機能する

と定式化されている。しかし、質的に異なる行動において、自発頻度が高い、低いということはどうやって比較できるのだろうか。例えば、動物実験では、水飲みという行動の自発頻度は、通常、給水瓶の飲み口を舐める回数によって測定される。そのさい、飲み口の形状によって、1回あたりに飲める水の量は、0.1mlであったり0.2mlであったりする。合計1mlの水を飲む際、前者なら10回、後者なら5回の水舐め反応が必要となるが、その場合、前者のほうが自発頻度が高いと言えるのだろうか。

このことに関しては従来より選択行動研究の一環としてさまざまな理論が提唱されているが（Mazur, 1994参照）、その代表的研究者の一人であるBaumは、巨視的視点（molar view）を重視する立場から、個々の反応ではなく一定時間持続する行動パターンを対象とする「パラダイムシフト」の必要を説いている（Baum, 2002）。

(2)行動の「入れ子」構造

長谷川（2004, 23-25頁）が述べたように、行動には、直接的に結果が随伴する行動と、そのような強化機会を獲得するための行動がある。例えば、「テーマパークに行く」という行動は、それ自体が強化されるものではない。実際にテーマパークに行った後、絶叫マシンに乗ることによる加速度の変化が好子になる場合もあれば、童話的な風景が好子になる場合もあれば、同行者とワイワイ楽しむことが好子になる場合もある。つまり、「テーマパークに行く」という行動自体は、テーマパークに行った後で行われるであろう種々の行動機会を獲得するための行動であり、そこに行ったあとで可能となる種々の行動がその入れ子（nest）の中に組み込まれているのである。Baum（2002）もまた、バッティングという行動が野球という行動の入れ子になっているという事例を挙げているほか、

生涯活動（Life）>レクリエーション活動（recreation）>種々のレクリエーション行動（テレビ鑑賞、読書、映画鑑賞、ウォーキング...）

というように、より長期的な視点で行動の階層性に注目する必要があることを説いている。

(3)Rachlinの目的論的行動主義と総合的な行動評価

Baumとともにオペラント選択行動研究の第一人者の1人として知られるRachlinは、自己制御の理論を発展させるなかで、目的論的行動主義の立場を鮮明にしている（Rachlin, H, 1992; 1994; 2000）。Vyse（2004）の論考によれば、目的論的行動主義では、個々の行動は、長期的な視点で行動全体が評価された時に初めて「意味づけ」られる。

この長期的な視点は、さらに行動の総合評価に発展する。Rachlin（2000）は、「ハンマーを振っている」というフィルムの1コマから、彼は本当のところ何をしているのか？を想像するという事例を挙げている。

- a. ハンマーを振っている
- b. 釘を打ち付けている
- c. 木材を接合している
- d. 木を貼り合わせて床を作っている
- e. 家を建てている
- f. 自分の家族のための家を建てている
- g. 家族を養っている

h. 良き夫および父親になっている

i. 良き人になっている

Rachlin (2002) は、より長期的な視点を持つことができれば、仮の話として、対象者の全人生をすべて把握できるような全知全能の観察者であれば、対象者の「心の中」を除かなくても、ハンマーを振る人が良き人であると結論することができるかと説いている。

もっとも、1人の人間が他者の人生を一生涯つききりで観察するということはできない。実際にできるのは、記憶に残っている過去の断片をつなぎ合わせることだけである。そのさい、どの断片を選ぶのか、また、選び方を変えるにはどうしたらよいかの問題となる。これについて、ナラティブセラピーと関連づけて後述する。

4. 長期にわたる行動傾向の安定性

(1)長期的な視点と「長期安定」との違い

行動分析学では近年、長期的な安定性や一貫性に注目する動きも出てきた。初めに指摘しておくが、単に長期的な視点から行動をとらえるということと、長期間にわたって一貫した行動が見られるということでは意味が異なる。前者の場合は、長期間における行動変化や変動も検討対象となるが、後者の場合は、環境変化や状況・文脈に依存しない安定した行動傾向に関心が向けられている。後者は、伝統的な性格心理学やパーソナリティ研究を含んだ「Trait Psychology」の領域に近い内容を含んでいる。

ちなみに、『Concise encyclopedia of psychology (コンサイス心理学百科事典)』(Corsini, 1987, 1130-1131頁)では「Trait Psychology」は以下のように定義されている。

- ・ Trait psychology is an approach to the theory and measurement of personality relying heavily on the concept of trait as a fundamental unit.
- ・ Traits are defined in various ways. At the simplest level, they are seen as relatively enduring descriptive characteristics of a person. At a somewhat broader level, traits are defined as predispositions to behavior that are both enduring (i.e., having temporal consistency) and wide ranging (i.e., having cross-situational consistency)... The strongest, most pervasive dispositions within a person, he called cardinal traits.

要するに、比較的長期にわたり状況を超えて一貫性を示すような行動傾向があることを前提として論を進めたり、その測定方法を開発したりする心理学は「Trait Psychology」と呼ばれる。但し、実質的には、「性格心理学」や「パーソナリティ心理学」の主要な立場と大差ない。

(2)「Trait Psychology」との共通点

Vyse (2004) は、まず、3. にも述べたBaum (2002) の論考やRachlin (1992, 1994, 2000) の目的論的行動主義 (Teleological Behaviorism) の主張に言及しながら、行動分析学の少なくとも一部の学派が長期間安定した行動傾向に関心をいざようになり、結果的に「Trait

Psychology」と同じ対象を扱うようになってきたことを指摘した。Vyse (2004) が指摘するように、じっさい、日常生活における人間行動の多くは一貫しており、環境の変化を受けにくい特徴をもっている。

5. 安定的かつ一貫した行動傾向が過大視されることへの疑義

以上、行動分析学において、より長期的な視点から、行動の安定性や一貫性を重視する動きが見られるようになってきたことを概観した。ところがそのいっぽう、行動分析学以外の心理学、あるいは、社会学、精神医学、哲学などの領域では、むしろ逆に、行動の安定性や一貫性に対する疑義が唱える傾向にある。そのような論考自体はこれまでも、それぞれの専門領域の中で学説の1つとして提唱されてきたが、日本国内においてここ数年、一般読者向けにも同趣旨の語りかけが行われるようになってきた点はまことに興味深い。そのいくつかを以下に概観してみよう。

(1)シゾフレ日本人論

「シゾフレ人間」、「メランコ人間」という呼称は、精神科医の和田秀樹氏 (和田, 1994; 1996) が精神医学用語を健常者の行動特性に転用したものであり、

【分裂病と躁うつ病の2つが】人間の精神的な退行の行き着く果てだとすれば、人間のパーソナリティは分裂病に引かれやすい人と躁うつ病に引かれやすい人に分かれるはずである [和田, 1996, p.82]。

が前提条件となっている。

和田 (1996) は、メランコ人間 (躁うつ病型) の時代からシゾフレ人間 (分裂病型) の時代への変化があったという指摘 [p.52 ~ 54, 115 ~ 120] に引き続いて、「ああ言えばこう言う」型の場当たりの取り繕いを引き合いに出しつつ、シゾフレ人間を

シゾフレ人間にとっての首尾一貫とは、今の周囲の世界に合わせることであり、メランコ人間にとっての首尾一貫は、自分のそれまでの言動や、自分の常識、自分の秩序に合わせることなのだ。メランコ人間にとっては、それまでとってきた態度を平気で変えて、周りの言っていることに何でも合わせるシゾフレ人間の言動が非常にチャランポランに見えるだろうが、シゾフレ人間にとっては、それで首尾一貫しているわけである。【111頁】

というように特徴づけている (111頁)。但し、これらの分類は相対的なものであって、同じ人間の中に2つの傾向があり、時代背景により偏りが生じてくるというのが元々の主張である (和田, 1994, 238頁)。

和田氏の主張は、必ずしも綿密な実態調査に基づくものであるとは言えないが、現代における学生気質の変化、若者の職業観、団塊世代と若者世代との価値観の相違について、うまく説明している。

ところで、浅野 (2005) は、精神医学者である和田 (1994, 1996) とは全く別の社会学の立場から、今日の日本にける「多元化する自己」の広がりを指摘している。浅野 (2005) は、青少年研究会 (代表・高橋勇悦大妻女子大学教授) が都市部の若者を対象に1992年と2002年に行った

調査結果、あるいは辻大介氏の1999年公表の調査結果などにに基づき、

- (a)自己を一貫させるべきであるとする規範意識（「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切」に対する肯定的回答）は目だって低下している。
- (b)この10年間で何らかの変化が若者の対人関係・自己意識に起こったとすればそれは希薄化や引きこもりではなく、状況志向化・フリッパー志向化であり、多元化であるといえそうだ。
- (c)「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切」という質問に対する肯定的回答は目だって低下している。これは多元化への規範的な敷居が大きく下がったことを意味しており、多元化へ向かう一つの傾向性と見なしてよいだろう。

和田（1994, 1996）が指摘する「シゾフレ人間化」は、1970年代中盤を境にした学生のパーソナリティの変化（それに伴う、五月病からスチューデント・アパシーへの問題変化）に注目したものである一方、浅野が指摘する「10年間」は1992年から2002年における変化であって、時代が異なるが、これは和田氏のいう「シゾフレ化」がさらに進んでいると見なすこともできるだろう。

(2)「モード性格」論

「モード性格論」はサトウ・渡邊（2005）が一般読者向けに提唱しているアイデアであり、

- ・安定よりも変化を重視する。
- ・均質性より多様性を重視する。

を特徴としている（249頁）。

性格が安定しているように思えるなら、それは自分の問題ではなく環境の問題です。あるいは与えられている役割の問題かもしれません。環境や役割は固定的なものですから、もし自分の性格が凝り固まっているように思えたら、自分ではなく周りのことを考える必要があります。【249頁】

と述べているように、「性格」という言葉を使っているものの、実質的には「trait psychology」ではなく行動分析学に近い視点で行動傾向を捉えていると言えよう。

サトウ・渡邊（2005）はまた、「性格」には、一人称的性格、二人称的性格、三人称的性格、という三つの異なる性格、よりわかりやすく言い換えれば、「自意識としての性格」、「関係としての性格」、「役割としての性格」*2という3つの視点があり、特に二人称的性格は多重モードであり、私たちは実際の生活の中で、自由にモードを変えて行動や性格を変えて生きていると指摘している（236頁）。

上記(1)で引用した和田（1994, 1996）が「シゾフレ化」の急増を憂慮し「メランコ化」を増やすための入試や学校教育のあり方を説いているのに対し、サトウ・渡邊（2005）は、そのようなタイプ分け自体を否定し、人稱的性格別のモードチェンジ的な微調整、あるいはチューンアップをしながら生活する必要性を説いている（240-241頁）という点で大きく異なっている。

サトウ・渡邊（2005）の論考は、かつて著者達自身の手で翻訳されたMischel（1968）のパーソナリティ理論、すなわち、人の性格は状況の影響で大きく変化すると説く「状況論」的パーソ

*2 千田（2005）は、「アイデンティティ」に還元されない「ポジショナリティ positionality」の概念を取り上げているが、このような視点と、ここに論じられている人稱性格には多くの共通性があることを指摘しておきたい。

ナリティ理論に由来するものと考えられる。

(3)エコロジカルな私論議

河野（2006）は

〈心〉はからだの外にある「エコロジカルな私」の哲学

と題する著書の中で、不毛な「自分探し」を煽る心理主義的発想を厳しく批判している。ここでは紙数の制約上、本稿に関係のある論点を要約引用するにとどめる（傍点、太字等一部改変）。

- (a)私たちの「知る自己」が同一であるとするならば、それはある一定の環境や状況に関わり続けているからである。…「私は何者か」と自問するときに私たちが探し求めているのは、じつは、一貫した環境であり、統合性のある環境なのではないだろうか。（第一章：37頁）
- (b)私の性格の同一性とは、せいぜい種類の同一性、あるいは「家族的類似」でしかない。（第二章：83頁）
- (c)パーソナリティ理論は、遺伝性と社会的な有用性を直結したような概念を作り出しかねない点において、被験者にミスリーディングな自己観を提供してしまう可能性がある。（第二章：104頁）
- (d)私たちがすべきは、心理主義にとらわれたままで、無自覚のうちに自己を既存の社会システムに過剰に適応させてしまう「自分探し」などではなく、環境リテラシーを通じて、自分（たち）自身で環境と自分（たち）との関係性をリデザインすることである。本当の自分探しとは、自分が充実して生きられる環境（ニッチ）を自ら形成し、再形成してゆくことなのである。（終章：244-245頁）

著者あとがき（265頁）によれば、河野氏の論考は、「ギブソンの心理学にインスピレーションを受けた哲学的立場」であるということであるが、行動の原因を外の世界との関わりに求めるといふ点、さらに、心理主義を否定し、「自分が充実して生きられる環境（ニッチ）を自ら形成し、再形成してゆく」という姿勢は、まさにスキナーの徹底的行動主義と軌を一にするものであると言えよう。

河野（2006）には、本章(1)で取り上げたサトウ・渡邊（2005）の「モード性格」が肯定的に引用されており（236-237頁ほか）、2つの立場からの連携が期待される。なお、スキナーの徹底的行動主義の立場と、J. J. Gibsonの生態学的知覚論の立場との類似性および相違点については別の機会に取り上げることにしたい。

(4)「死の壁」論議

『死の壁』（養老, 2004）は一連の一般向け著作のうちの1冊であり、『バカの壁』、『超バカの壁』と合わせた三部作の発行部数は、2006年2月7日の朝日新聞全面広告によれば、500万部を超えているという。一般読者への影響の大きさを考慮し、本稿に関係のありそうな記述をいくつか要約引用しておくことにしたい（改行部分一部改変）。

- (a)…ここでいう情報化社会とは、いわゆるテレビやインターネットの普及といった、現代において使われている味のみを指しているわけではありません。本来、日々変化しているはずの人間が不変の情報と化した社会のことを指しています。（26-27頁）
- (b)本来、人間は日々変化するものです。生物なのだから当たり前です。…それでも毎日が覚めるたびに「今

日の俺は昨日の俺とは別人だ」と思うようでは、社会生活も何もあったものではない。だから、意識は「昨日の俺は今日の俺と同じだ」と自分に言い聞かせ続けます。(27頁)。

(c)人間は変化しつづけるものだし、情報は変わらないものである、というのが本来の性質です。ところがこれを逆に考えるようになったのが近代です(27-28頁)。

(d)常に変わらない自分が、死ぬまで一貫して存在している、という思い込みが日本人の前提になっています。... おそらくこの思い込みというか論理は、なかなか破られないものだからこそ、一般化したのでしょう。破られにくいのは、たとえ他人から指摘されても「変わった部分は本当の自分ではない」という言い訳が常に成り立つからです。

このように、養老(2004)は、日本人あるいは現代人は、「情報化社会の中であらゆる人間は変わらないものだ」という固定観念を持つようになったと指摘している。これは、上記(1)の「シゾフレ人間化」や「多元化する自己」の広がり論とは逆の主張であり、どちらが正しいかを判定することはそう簡単にはできない。しかし、いずれにせよ、このような著作に接した一般読者が、その影響を受けて、一貫性という素朴な前提を疑うようになるというのはありうることだ。

(5)ナラティブセラピーをめぐる動き

友人4人でドライブに出かける時、自分自身が運転手を引き受けるか否かは何によって決断されるのであろうか。素朴な強化理論は、「自分で運転する」ことが何度も強化されている人は運転手を申し出る一方、最近、事故や違反を経験した人はそれによって運転行動が弱化され、運転手を辞退する可能性が高まると予測するだろう。

しかし、運転経験の長い人の場合、過去に何度か事故や違反をしたこともあれば、安全にドライブを楽しめたこともあり、運転手を引き受けるという行動が1回の出来事によってそのつど強化されたり弱化されたりということは考えにくい。むしろ、「自分は運転が上手だ」(もしくは「自分は運転が下手だ」という「自己評価」が運転手を引き受ける決め手になっている可能性がある。

このような事例は、ナラティブセラピーの入門書(例えばMorgan, 2000)にも例示されている。要するに、過去の個別的な行動の強化や弱化ではなく、行動全体の総合評価の結果として将来の行動の選択がなされるという論理である。3.(3)に述べたRachlinの目的論的行動主義においてもこれを説明するための理論は提唱されているが、ナラティブセラピーと称される一連の療法ではさらに、

私たち人間は、ものごとを解釈する生き物です。日々いろいろな出来事を経験し、そこから意味を見出そうとします。私たちの人生のストーリーは、いくつかの出来事が時間軸上で、特定の順番につなげられることによって、そして、それに意味を見出したり、それを説明するための方法が見つげられることによって、創造されます。【16-17頁】

という視点から、同じ人間の体験の中にさまざまなストーリーが構築される可能性を重視し、かつ、よりポジティブなストーリーをオルターナティブ・ストーリーとして仕立て、問題を外在化するなどの手法により問題の解決をめざしている。

浅野(2005)によれば、かつてナラティブセラピーの強力な推進者であったケネス・ガーゲ

ン^{*3}は、その自己物語論の中で、自己物語がカバーする時間的範囲の長短によってマクロな物語とミクロな物語を区別していた。ミクロな物語はマクロの物語の入れ子構造(nested narrative)となっており、入れ子構造である限りにおいて最も外側の枠が全体の統合性を支えていると彼は論じていた(87頁)。

「多くのストーリーを同時に生きる」という発想(Morgan, 2000)も、いま述べたガーゲンの「入れ子構造」の発想も、「多元的な自己」の表れとして注目に値する。また、「入れ子構造」は、3.(2)で述べたBaum(2002)の理論に似通うところがある点を指摘しておきたい。

なお浅野(2004, 2005)が指摘しているように、ケネス・ガーゲン自身は自己物語論の提唱者の一人でありながら1990年代には物語論に距離をおくようになる。紙数の違いで本稿ではその詳細に立ち入ることができないが、その「変節」が「自己物語」の捉え方の誤りによるものか、それとも、正しい変化であったのか、検討しておく必要があるだろう。

「自己物語」に関してはもう1つ、現代的ニーズについて考慮しておく必要がある。浅野(2005, 92-93頁)によれば、ここ15年の間に日本で起こった社会的変化は自己物語を語るための諸条件を激変させてしまった。

第一に、労働力市場の流動化に伴って標準的な人生物語が失効すると同時に、自己責任をベースにした新しいシステムはそれぞれの場面において各人が自分自身についての物語を語るよう強く要求するようになってきている(各種入試や就職・転職における自己アピール等)。

第二に、消費社会の進行は、商品を記号として消費し、それを通して自己アイデンティティを構築・再構築するという作法を一般化させてきた。このような作法を幼いころから身につけた者たちは、場面に応じて自己物語を柔軟に編集・再構成するであろう。

第三に、情報社会の進展、とりわけインターネットの普及は、自己の複数性を低リスクで維持・管理するためのインフラを提供する。例えば、複数の日記・ブログを書き分けているユーザーの存在などはそれを象徴している。

ナラティブセラピーの意義がどうあれ、とにかく、現在に生きる我々は、さまざまな要請に応じて自己物語を作り上げたり、またWeb日記やブログという形態で自ら進んで自己物語を作成し公開することで強化される環境に置かれているのである。

(6)脱アイデンティティ論議

以上、主として一般読者向けの著作を概観してきた。一般書ではなく学術書の範疇に属するが、最後に上野(2005)の「脱アイデンティティ論」の序章部分に少しだけふれておこう。

「アイデンティティ」という言葉は、Google^{*4}で検索すると2006年4月9日時点で273万件もヒ

*3 ガーゲンの社会構成主義に関しては、本稿の前作にあたる長谷川芳典(2005). スキナー以後の行動分析学⑤社会構成主義との対話. 岡山大学文学部紀要, 2005, 44, 43-62. を参照されたい。

*4 <http://www.google.co.jp/>

ットするほどに数多く使われているが、その起源や使われ方（誰がどういう目的で使っているか、どういう有用性があるか、何を「説明」するのかそれを使うことで何が明らかとなり何が見えにくくなるのか、...）については議論が尽くされているとは言い難い。

このことに関して上野（2005）は序章の最初の部分で

今からふりかえってみれば、二〇世紀は「アイデンティティ identity」という概念が席捲した時代だった、と言ってよいかもしれない。ひとびとは「アイデンティティ」なしでは生きられないかのようにふるまい、宗教や文化や民族アイデンティティをめぐって殺し合うことさえ起きた。だが、あとで述べるように、「アイデンティティ」という概念の歴史はそれほど古くない。フーコーが「セクシュアリティの歴史」(Foucault[1976=1986])で論じるように、カテゴリーの存在しないところには、そのカテゴリーが指し示す知の様態そのものが存在しない。「アイデンティティ」を通歴的な概念とみなす代わりに、それが登場したプロセスをたどり直すことで「アイデンティティ」という概念そのものを、歴史化し、脱構築することはできないだろうか。この問いは、同時に「アイデンティティ」という概念が登場したときに、それが言及すべき特定の歴史的現象が生まれたという推測と結びついている。だとすれば、その歴史的現象そのものに変化が起きれば、「核家族」同様、「アイデンティティ」という概念も、耐用年数が切れるにちがいない。【2頁】と、指摘している。

紙数の制限によりこれ以上の言及は別の機会にさせていただくが、とにかく、アイデンティティを当然の前提とせず、その概念の果たす役割について再検討を加えながら慎重に扱っていく必要があることは確かである*5。

6. まとめ

本稿は、「長期的な視点から行動を捉える」というタイトルのもとに、行動分析学における最近の動向と、他領域における主として一般向けの著作に見られる新たな動きを概観し、両者の接点を探ることを目的としてきた。

ここで改めて「長期的な視点から行動を捉える」ことが、

- ・何のために？
- ・誰によって行われるのか？

を確認しておくことにしたい。

*5 「アイデンティティ」は厳密には「自我同一性 ego identity」と「自己同一性 self identity」を区別して使う必要がある。もっとも前者の「Ego」というのは、フロイトが作った構成概念のようなものであり、精神分析学の前提を受け入れるか、もしくは別の形できっちり定義しなければ議論の俎上に載らない。但し、フロイトやエリクソンを離れても、発達心理学の研究テーマ、あるいは記述概念として「自我の発達」という言葉を使うことはできるであろう。なお上野（2005）はこのことに関して

実のところ、フロイトの自我心理学に対してエリクソンのアイデンティティ概念が果たした貢献とは、この自己の構築性にある、と言ってよい。エリクソンは、フロイトの「自我」概念を、ある意味で脱本質化した。だからこそアイデンティティの概念は、これ以降社会学に受け継がれていくことになったのである。このようなアイデンティティの構築性からは、あとで論じる「アイデンティティの形成」や「アイデンティティの管理」のような概念が生まれるまではあと一歩であろう。【9頁】と述べている。

まず、行動分析学の視点から言えば、「何のために？」は紛れもなく、「行動の予測と制御を目標と」を考えてよいだろう。但し、「何のために予測と制御をするのか」は、「誰によって？」が自分自身の場合と他者の場合で著しく異なる。他者による予測と制御はしばしば悪用されることがあるので注意が必要である。

自分自身を主人公とした場合、長期的な視点から過去を捉えることは、いまの行動の問題を取り除き、将来の行動を望ましい方向に改善していく上で不可欠である。2. で述べたように、過去の出来事は、習得性好子、習得性嫌子、弁別刺激、条件刺激、... というような形で「いま」の行動に影響を及ぼすものとして考慮されているが、その影響は決して断片的、機械的なものとは言えない可能性がある。

行動分析的に言えば、「過去を意味づける」とは、過去の出来事を言語化したり視聴覚刺激が呈示されやすい状況を整備することで、過去の出来事に関連した条件反応やオペラント反応を起しやすくすること、さらに、一連の出来事に繋がりをを持たせることで、現在の行動を強化したり確立操作となるような機能を持たせる行動であると言える。

人生は多かれ少なかれ、成功と失敗の繰り返しで進行するものである。行動原理から言えば、失敗した時にはその行動は弱体化、成功した時には強化されるというのが一般的であるが、失敗が成功のきっかけとなる場合、失敗は必ずしも行動を弱体化しない。失敗とその後の成功のヒストリーは、セットにされて肯定的に評価されていくのである。それは、成功と失敗の積み木から何かの形を作るような行動であり、新たなオペラント行動であるとも言える。うまく積み木が重ねられる人は、より肯定的な生き方を実現することができるだろう。

いま述べたことは、ナラティブセラピーの手法にも関係しているが、そうは言っても、あらゆる不幸が、積み木の並び替えだけで幸福に転じるというような生易しいものではない。ナラティブセラピーが言うところの「オルターナティブ・ストーリーの構築」や「問題の外在化」は、「過去の出来事をつなぎ合わせる」というオペラント行動の形成と強化の成否にかかっているといっても過言ではないだろう。

その際に検討しなければならないのが、「態度」や「信念」をどう扱うのかという問題である。行動分析学の領域では1994年頃より、Guerinを初めとするニュージーランドの行動分析学者らの手によって、言語行動と関連づけながら、これらの問題が本格的に検討されるようになってきた（例えば、Guerin, 1994）。自己物語であっても、それが言語行動の形をとる以上は、それが使われる言語共同体と無関係ではいられない。紙数の制限上、詳細に立ち入ることはできないが、スキナーの言語行動理論の基本概念である「イントラヴァーバル」や「オートクリティック」を用いたGuerinらの論考は、ナラティブの研究に大いに役立つものと期待される。

さて、本稿では行動分析学の立場から長期的視点に注目したVyse（2004）の論文を何度か引用した。その論文のタイトルが「Stability over time: Is behavior analysis a trait psychology?」となっていることから分かるように、Vyseは、1 個体の行動を単に長期的視点から捉えるというだけでなく、その安定性に注目することにメリットがあると説いている。

もっとも、Vyseが言うところの安定性は、どちらかと言えば「環境変化への頑健性（頑強性）」

というような意味であって、行動自体が安定しているということとは異なる。

論理的には、環境変化への頑健性の有無と行動の安定性(不変性)には2×2の4通りのパターンが考えられる。

頑健性 ○、行動安定性 ○ →どのように環境が変化しても、いつも同じパターンで対処する。「不屈の精神」、
「頑固で融通がきかない」

頑健性 ○、行動安定性 × →環境変化には無頓着だが、行動が不安定で何をするか分からない。「情緒不安定」、
「衝動的、発作的な行為」

頑健性 ×、行動安定性 ○ →環境変化に応じて臨機応変に対処。「シゾフレ型人間」、「モード性格」

頑健性 ×、行動安定性 × →環境の変化を受けやすく、なおかつ、それにうまく対処できない。→「ちょっとした変化にたじろぐ」

という4通りである(「」内は、そのようなパターンに対する一般的な形容)。

もう1つ、安定性という概念は、絶対的・本質的なものではない。どの側面の何を測るかによって、「安定」にも「不安定」にもなる。「変化への頑健性」ということだけを指標にするならば、活発な活火山は気象変化から頑健であると言うこともできる。つまり、活火山自体はその火山独自のリズムで激しい噴火を起こしたり、休止状態になったりする。しかし、季節や降雨と無関係に噴火活動が起こるのであれば、「安定」であると言えないこともない。

規則性や周期性が長期間保持される状態は一般に「安定」と言われる。といっても、複雑な数式で初めて表現される場合も「規則的」であることに変わりはない。そういう規則性は、かなりあとになってから「発見」されるものであるから、規則性の有無をもって「安定」かどうかは事前には判断できない。

「長期的な視点から行動を捉える」際の「安定性」や「一貫性」は、自分自身ではなく他者にとって有用な特徴であると言える。なぜなら、他者にとっては、当人の行動がより安定し一貫しているほど予測しやすく、対処しやすいからである。

いっぽう、「安定性」や「一貫性」を強化することが本人自身のメリットになるのかどうかは、一概には言えない。「2. (2)C. 累積的な結果を確認することによる確立操作と付加的強化」という観点から言えば、安定的で一貫した行動は、行動自体の精緻化、高度化を可能にするばかりでなく、結果を蓄積させ、より大きな付加価値をもたらす。例えば、いろいろな楽器の演奏を中途半端に習う人よりは、ピアノ筋で練習に励む人のほうが、演奏技術のレベルが向上し、より美しいメロディーを奏でる結果を出現させることができる。いっぽう、現代の消費社会の中では、多様な価値観が混在し、一貫性よりも「モード性格」のほうが適応しやすいという状況にもある。

最後に、地球温暖化問題、廃棄物処理問題、省資源化といった、現代社会の至上命題を解決するという点から言えば、「ライフスタイル」と呼ぶべき何らかの一貫性が必要であるということを目指しておきたい。価値観の多様性がいかなるものであれ、地球規模の環境はどうしても守っていかなければならない。価値観がどうあれ

・クールビズやウォームビズに協力する

・ゴミの分別収集に協力する

・自家用車ではなく公共交通機関を利用する

といった行動を増やしていく必要があることは言うまでもないところであるが、これらを個々の行動の強化や弱化という結果随伴だけでコントロールしていくことには限界がある。なぜなら、望ましい行動を正の強化だけで形成しようとしても、利便性(=「面倒なことはしない」、「それを守らなくても目先の不利益は何も生じない」など)によって自然に強化される反環境的行動を減らすことは簡単にはできないし、また、望ましくない行動を罰的に統制しようとしても必ず抜け道(=「人に見られていなければ分別せずにゴミを捨てる」、「資源再利用目的と偽って不法投棄する」など)ができてしまうからである。より有効な手だては、「環境にやさしいライフスタイル」のもとで、その基準に合致する行動を自然に強化することである。そのような点から言えば、断片的な行動強化ではなく、「スタイル」という一貫性した行動が強化されるよう、環境を整備していく必要がある。

引用文献

- 浅野智彦 (2004). 自己物語論が社会構成主義に飲み込まれるとき ケネス・ガーゲンの批判的検討. *文化と社会*, 4, 121-138.
- 浅野智彦 (2005). 第二章 物語アイデンティティを越えて? [上野千鶴子 [編]. *脱アイデンティティ*. 勁草書房, pp.77-101].
- Baum, W. M. (2002). From molecular to molar: A paradigm shift in behavior analysis. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 78, 95-118.
- Corsini, R. J. (Eds.) (1987). *Concise encyclopedia of psychology*. John Wiley & Sons.
- Guerin, B. (1994). Attitudes and beliefs as verbal behavior *The Behavior Analyst*, 17, 155-163.
- 長谷川芳典 (2004). スキナー以後の行動分析学 (14) 随伴性概念の再評価. *岡山大学文学部紀要*, 42, 13-33.
- 河野哲也 (2006). 〈心〉はからだの外にある「エコロジカルな私」の哲学. 日本放送出版協会.
- Mazur, J. E. (1994). *Learning and Behavior*. NJ: Prentice-Hall. [メイザー (著). 磯博行・坂上貴之・川合伸幸 (訳). (1996). *メイザーの学習と行動*. 二瓶社.]
- Mischel, W. (1968). *Personality and assessment*. New York: Wiley. ([詫摩 武俊 (監訳) 1992 *パーソナリティの理論—状況主義的アプローチ*. 誠信書房]
- Morgan, A. (2000). *What is narrative therapy? An easy-to read introduction*. Dulwich Centre Publications. [小森 康永・上田牧子 (訳). (2003). *ナラティブ・セラピーって何?* 金剛出版]
- Premack, D. (1962). Reversibility of the reinforcement relation. *Science*, 136, 255-257.
- Premack, D. (1965). Reinforcement theory. In M. R. Jones (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation*: 1965 (pp.123-188). Lincoln: Univ of Nebraska Press.
- Rachlin, H. (1992). Teleological behaviorism. *American Psychologist*, 47, 1371-1382.
- Rachlin, H. (1994). *Behavior and mind*. New York: Oxford University Press.
- Rachlin, H. (2000). *The science of self-control*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- サトウタツヤ・渡邊芳之 (2005). 「モード性格」論—心理学のかしこい使い方. 紀伊国屋書店.
- 千田有紀 (2005). 第八章 アイデンティティとポジションナリティ 一九九〇年代の「女」の問題の複合性をめぐって [上野千鶴子 [編]. *脱アイデンティティ*. 勁草書房, pp.267-287].
- 杉山尚子・島宗理・佐藤方哉・マロット・マロット (1998). *行動分析学入門*. 産業図書.

Sundberg, N. (1987). Trait Psychology. (In R. J. Corsini (Ed.) *Concise encyclopedia of psychology*. John Wiley & Sons pp.1130-1131.)

上野千鶴子 [編] (2005). *脱アイデンティティ*. 勁草書房.

Vyse, S. (2004). Stability over time: Is behavior analysis a trait psychology? *The Behavior Analyst*, 27, 43-53.

和田秀樹 (1994). *シゾフレ日本人*. KKロングセラーズ.

和田秀樹 (1996). *受験勉強は子どもを救う：最新の医学が解き明かす「勉強」の効用*. 河出書房新社.

養老孟司 (2004). *死の壁*. 新潮新書.

(はせがわ・よしのり 社会文化科学研究科教員)